

専門家「感謝とねぎらいを」

被災者を支える土台は、支援者が元気に活動を続けること。被災地は、もともとメンタルヘルスの体制が弱かった地域で、日本トラウマティック・ストレス学会では震災以降、福島県を中心に地元の保健・医療関係者の心を支え、専門的な知識を伝える活動が続けてきた。

同学会の前会長、前田正治さん（福島県立医大災害こころの医学講座主任教授）は、過労の状況が続く▽復興の遅れ▽住民からの怒り、不満をぶつけられる▽将来の見通しがいまい▽支援者自身も家族との別居、避難などストレスを抱えているなどを挙げ、「支援者への支援」の大切さを

訴える。前田さんらが原発近くの自治体の公務員に聞き取り調査をしたところ、津波や原発事故の恐怖以上に「震災直後に殺到した怒りの電話に應對した経験」が深い心の傷になっていることが分かった、という。

同学会副会長の重村淳さん（防衛医大講師）は「支援業務にあたる人たちは、ストレスを抱えていても逃げることでできず、苦悩は大きい。感謝とねぎらいの

思いを持ってほしい」と、多くの学会のシンポジウムなどで呼び掛けている。福島第一・第二原発の職員たちは、被災者としてのつらい体験を背負いつつ、復興の中核を担う業務をしているが、「東電バッシング」による差別・中傷に苦しんでいるという。

NPO法人災害看護支援機構副理事長の山崎達枝さん（岐阜医療科学大非常勤講師）は、先月二十六日に

東京で開かれた日本集団災害医学会総会で、被災地の看護師たちが自責感、無力感、不全感などの多くの葛藤を抱えていることを紹介。アロマセラピーなど、心を癒やして語り合える場を設ける取り組みや、看護師を支える組織づくり、組織の管理者を支える激励が大切、と話した。

お断り「ホンネ外来は休みました。